総進図書

岡山　栄一　氏

「平成 30 年度　千葉県高校入試結果と今後の入試動向」

千葉県公立高校入試/30年度の概要と入試制度の方向性

（株）総進図書

後期選抜、志願倍率大幅低下！

現行の入試制度（前期選抜・後期選抜）になって８年目の入試であった。千葉県の入試制度は一昨年度（28年度）にいわゆるマイナーチェンジがあり、前期選抜における選抜枠（全体募集に対して前期選抜において募集する割合）が、専門学科及び総合学科について上限を 100%、つまり前期選抜で全ての人員を募集することが可能となった。今年度は該当する 56 校 93 学科のうち約 86%の 40 校 80 学科が前期選抜の選抜枠を100%に設定した。学科数は昨年度より減少したが、これは農業系、工業系及び商業系の学科再構成により全体の専門学科数が減少したためで、割合的には増加した。また、「県立学校改革推進プラン・第３次実施プログラム」により、我孫子高校及び君津高校に「教員基礎コース」が設置され、安房高校に「単位制」が導入された。31 年度入試においても、幕張総合高校の普通科から「総合学科」への変更、「保育基礎コース」、「福祉コース」の設置等の新たな改革が予定されている。

前期予定人員	22,482 人（224 人減）
志願者数	39,064 人（765 人減）
志願倍率	1.74 倍（1.75 倍）
欠席者数	202 人（206 人）
受検者数	38,862 人（761 人減）
合格者数	22,051 人（295 人減）
実質倍率	1.76 倍（1.77 倍）
後期募集人員	11,599 人（25 人増）
志願者数（2/23）	16,293 人（330 人減）
志願者確定数	16,281 人（338 人減）
志願倍率	1.40 倍（1.44 倍）
欠席者数	25 人（14 人増）
受検者数	16,256 人（352 減）
合格者数	11,181 人（286 人減）
実質倍率	1.45 倍（1.45 倍）

今年度の前期選抜は、昨年度全く同じ２月 13 日（火）、14 日（水）に実施された。予定人員 22,482 人に対し、39,064 人が志願し、志願倍率は 1.74 倍となった。予定人員は減少したが、それを大幅に上回る志願者数の減少があり、昨年度より 0.01 ポイント下降した。昨年度と同じく実施日が東京都内私立入試の後ということもあり、昨年度とほぼ同数の受検予定者の欠席があったため、実際の受検者数と合格者数から計算される実質倍率も 1.76 倍で、昨年度に比較して 0.01 ポイント下降した。例年高い倍率を示す普通科だが、2.50 倍を超す異常な倍率の学校・学科は昨年度と比べ大幅に増加し、15 校 17 学科（昨年度 11 校 13 学科）となった。県立千葉、県立船橋、千葉東、佐倉といった上位・人気校は常に３倍近い倍率を記録するが、今年度は昨年度低調だった東葛飾が３倍を超え、鎌ヶ谷、柏の葉といった中堅上位校も３倍近い倍率となった。一方、志願倍率が 1.00 倍に満たない学校・学科は、25 校 32 学科（一作年度 14 校 23 学科→昨年度 22 校 30 学科）となり、２年連続で増加した。二極化がさらに進み、前期選抜でのチャレンジ傾向が一層強くなったと言える。学科別では工業系の学科及び農業系の学科が苦戦を強いられ、千葉工業、市川工業といった都心部の高校でも定員を充足できない学科があった。看護系、国際関係に関する学科は根強い人気で、市立稲毛の国際教養は 2.50 を超える倍率を記録した。普通科志向は依然強く、普通科のみの志願倍率は 1.91 倍とほぼ前年度と同じであった。

後期選抜は３月１日に実施され、予定人員 11,599 人に対し、16,281 人が志願し、1.40 倍で昨年度より 0.04 ポイント下降した。これは、前期選抜においての定員充足率（募集人員に対する内定者数の割合）が下降したため、後期募集人員が昨年度を上回ったこと、さらに、志願者数が前期同様減少したことが影響していると思われる。しかしながら、実質倍率は 1.45 倍で、これは昨年度と同じ水準であった。定員を充足しない高校及び学科が昨年度より増加し、その充足しない程度も例年になく大きく、後期募集人員に対して実際の合格者数が大幅に削られたことが原因と考えられる。志願・希望変更を行った受検者も昨年度より増え、約 450 人の受検者が志願先の高校を変更した。志願・希望変更は倍率が高い学校が集中する都市部に集中するが、今年度は特に柏を中心とした第３学区、印旛地域の第４学区に例年にない大きな変動が見られた。また、東

金・茂原地域や9学区の市原地域でも例年になく志願先を変更する動きが見られた。2.00倍を超えた学校・学科は前年度よりさらに増え（一作年度7校7学科→昨年度10校14学科→13校14学科）、厳しい入試が続いた。今年度は中堅上位校の八千代・成田国際・鎌ヶ谷・柏南の躍進が顕著で、その一方で、例年高倍率を記録している県立千葉・佐倉・小金といったところは落ち着いた入試状況であった。今年度の特徴でもう一つ挙げておかなければいけないことは、2.00倍を超える学校が増加した一方で、志願倍率が1.00倍に満たない学校・学科も大幅に増加したということである。1.00倍に満たない学校・学科は26校38学科（昨年度20校27学科）にまで達した。その後に実施された二次募集においても例年にない募集人員（651名）を記録し、さらに志願者数は昨年度を下回る結果となり、ほぼ全入といった状況となった。

以上の結果から、今年度の千葉県公立入試は、最終的には例年にない緩やかな入試であったと言える。

各学区の概況（3学区激戦に！）

［1学区－千葉市］

学区（地域）	前期選抜	後期選抜
1学区(千葉市)	1.87倍(1.91)	1.54倍(1.57)
2学区(船橋・松戸他)	1.89倍(1.95)	1.51倍(1.56)
3学区(柏・流山他)	1.84倍(1.73)	1.56倍(1.38)
4学区(佐倉・四街道他)	1.71倍(1.71)	1.35倍(1.40)
5学区(佐原・銚子他)	1.29倍(1.34)	0.97倍(1.12)
6学区(成東・東金他)	1.42倍(1.45)	1.08倍(1.15)
7学区(茂原・いすみ他)	1.14倍(1.25)	0.87倍(1.06)
8学区(安房・館山他)	1.48倍(1.22)	0.97倍(0.85)
9学区(木更津・市原他)	1.54倍(1.57)	1.15倍(1.21)

前期選抜は、昨年度より0.04ポイント下降し、1.87倍に留まった。県トップの県立千葉は昨年の3.29倍より少し下げ3.00倍になったが、依然高い倍率で推移した。1学区二番手の千葉東は志願者数701名と大幅に増やし、3.25倍の超高倍率となった。市立千葉、市立稲毛の各普通科は昨年度の入試を反映し、市立千葉は下降（2.85倍→2.46倍）、市立稲毛は上昇（2.26倍→2.58倍）という結果となった。その他では、千葉女子が志願者数で100名増加させ倍率も2.12倍まで伸ばした。検見川は安定した人気で、今年度もわずかながら倍率を上げ2.51倍の厳しい入試となった。中堅校の千葉北は昨年度より倍率を下げ（1.85倍→1.76倍）、ここ3年下降の傾向が見られる。同じく中堅校の磯辺は、昨年の急上昇した倍率（2.84倍）の反動で約200名の志願者数減となり、志願倍率を大幅に下降させた。昨年新聞紙上で選抜方法の不透明さを指摘された幕張総合は、選抜方法の基準等を細かく明確化したにもかかわらず、志願者数は伸びず、1000名を割った990名に留まった。生浜は、昨年度同程度の志願者数を確保し、下位校では厳しい2.23倍を記録した。千城台、柏井、土気、犢橋の各高校は、緩やかな入試状況が続いているが、柏井高校は志願者数が伸びず、後期選抜でも定員を充足できず、二次募集を実施した。専門学科では、市立千葉の理数は昨年度とほぼ同じ倍率であったが、市立稲毛の国際教養は志願者を大きく伸ばし、倍率も2.73倍まで達した。幕張総合の看護科は2.48倍と人気を維持したが、京葉工業、千葉工業といった工業系の学科は苦戦を強いられた。

後期選抜では、前期選抜とほぼ同じ傾向を示した。前期選抜で高かった千葉女子、千葉東、検見川は高い倍率となった。県立千葉は昨年度を大きく下回り1.98倍の少数激戦となった。その他では千葉西が倍率を1.63倍まで伸ばし厳しい入試となった。一方、前期選抜で大幅な志願者数減の磯辺や幕張総合は、後期選抜でも昨年度を大きく下回る倍率（磯辺2.21倍→1.55倍、幕張総合1.94倍→1.55倍）となった。募集人員が少ないが、市立稲毛の国際教養は県内トップの3.50倍（昨年度2.60倍）を記録した。

［2学区－船橋・市川・松戸他］

船橋地区のトップ校県立船橋の勢い（3.28倍→3.38倍→3.40倍→3.50倍）が今年度も止まらない。今年度も前期選抜の志願倍率は3.50倍で県内一の倍率を記録した。高くかつ中身の濃い進学指導を理由に、船橋近隣だけではなく幅広い地域からの県立船橋志向が顕著となっている。2番手の薬園台は、昨年度回復した志願者数を約100名減らし、2.10倍の異常事態となった。単なる隔年現象とは言えない志願者数の大幅減の原

因を早急に分析することが重要だと考える。続く上位校の八千代は、志願者数を伸ばし、2.60 倍まで回復した。船橋東は 1.82 倍まで下降し、近年にない低調な入試となった。津田沼はほぼ昨年度と同じ水準で 2.28 倍と依然人気を確保した。下位校では、船橋法典が 2.00 倍を超え昨年度よりさらに厳しい入試となった。市川地区では国府台は安定した入試状況で、国分及び市川東が高い水準で人気を得ている。市川昴も志願者増加の傾向を示している。松戸地区では、小金、松戸国際の人気が依然高い。特に小金は以前の生徒の自主性を重視する方針から、その伝統を継承しつつ進学指導にも力を入れてきており、進学実績等の向上も見られ、その点が評価されていると思われる。松戸国際は、今年度は若干志願者数を減らしたが、生徒からは依然高い支持を得ている。以前は圧倒的に女子が多かったが、男子の志願者が増加傾向にあり、その点を考えれば進学実績も今後伸びていくと思われる。その他では、市立松戸が 2.20 倍を記録し厳しい入試となり、松戸馬橋も多くの不合格者を出した。

後期選抜では、志願倍率の上昇が目立ったのは、県立船橋（2.35 倍→2.43 倍）、八千代（1.63 倍→2.14 倍）、逆に下降したのは、薬園台（2.13 倍→1.47 倍）が前期同様非常に低調な入試となり、ほぼ前期選抜の傾向を反映した。専門学科では、松戸国際の国際教養科が 2.63 倍と昨年同様高い倍率を記録した。

表:前期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

船橋	普通	3.50 倍
千葉東	普通	3.25 倍
東葛飾	普通	3.07 倍
県立千葉	普通	3.00 倍
県立船橋	理数	3.00 倍
鎌ヶ谷	普通	2.91 倍
柏の葉	普通	2.84 倍
小金	総合学科	2.83 倍
成田国際	普通	2.83 倍
市立稲毛	国際教養	2.73 倍
佐倉	普通	2.70 倍
国分	普通	2.65 倍
市立千葉	理数	2.63 倍
柏南	普通	2.61 倍
八千代	普通	2.60 倍

［3学区ー柏・流山・野田・我孫子・鎌ケ谷］

第 3 学区は、前期選抜及び後期選抜ともに昨年度より厳しい入試となった。昨年度と比較すると、前期選抜は 1.73 倍→1.84 倍、後期選抜 1.38 倍→1.56 倍で、大幅な上昇を記録した。昨年大きく志願者を減らし倍率もトップ校には物足りない数字であった東葛飾は志願者を約 100 名増やし、前期倍率も 3.00 倍を超えた。厳しい入試が続く県立船橋からの移動や、昨年度の低調な志願者数を見越しての増加と思われる。県立柏も倍率を昨年度の 2.05 倍から 2.36 倍まで上昇させた。鎌ヶ谷、柏南も上昇が顕著で、特に鎌ヶ谷は前期選抜 2.91 倍、後期選抜 2.13 倍となり、多くの不合格者を出した。鎌ヶ谷、柏南ともに、進学実績が伸びてきており、入学後の学習指導や進路指導にさらなる充実ぶりが期待されている。さらに、柏の葉も、40 名の定員減も重なり、前期選抜 2.84 倍の高倍率を記録し、264 名となる多くの不合格者を出す結果となった。逆に比較的緩やかであったのが、柏中央、流山おおたかの森で、ともに昨年度を下回り、2.00 倍前後の入試となった。中堅校では、定員 40 名減の野田中央が過去 3 年間では最も高い 1.98 倍の厳しい入試となった。下位校では、鎌ヶ谷西、流山南及び我孫子東が、前期選抜で昨年度を上回り、逆に昨年 1.71 倍で厳しかった沼南高柳や 1.62 倍の流山北が倍率を下げた。

表:後期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

市立稲毛	国際教養	3.30 倍
松戸国際	国際教養	2.63 倍
東葛飾	普通	2.60 倍
県立船橋	普通	2.43 倍
市立習志野	商業	2.38 倍
佐倉	理数	2.30 倍
市立千葉	理数	2.30 倍
八千代	普通	2.14 倍
成田国際	普通	2.14 倍
鎌ヶ谷	普通	2.13 倍
千葉東	普通	2.10 倍
柏南	普通	2.03 倍
県立千葉	普通	1.95 倍
松戸国際	普通	1.93 倍
県立柏	普通	1.92 倍

後期選抜にも、前期選抜同様上昇傾向が多く見られた。志願変更で大きな変動があったが、軒並み倍率を上げる学校が多く、東葛飾（1.95 倍→2.60 倍）、県立柏（1.49 倍→1.92 倍）、鎌ヶ谷（1.80 倍→2.13 倍）、柏南（1.81 倍→2.03 倍）、柏中央（1.51 倍→1.79 倍）、柏の葉（1.65 倍→1.83 倍）となった。逆に、昨年度厳しい入試であった流山おおたかの森は、1.44 倍に留まり、まるで昨年度の裏返しの入試であったと言える。

［4学区－成田・印旛・佐倉・四街道他］

成田国際の倍率上昇が顕著であった。27年度からのグローバルスクールの設置を背景に、普通科及び国際科ともに人気が高く、普通科はこの3年間比較的安定した志願状況が続いていたが、前期選抜では、普通科で志願者数を大幅に増やし、昨年度の2.29倍から2.83倍まで上昇した。後期選抜も過去3年間で最も高い2.14倍となった。トップ校の佐倉の普通科は、前期選抜はほぼ昨年度なみの2.70倍の厳しい入試となったが、後期選抜はやや緩めの1.89倍に留まった。理数科は前期・後期ともに倍率を上昇させ、理数志向の生徒をしっかりと確保した。その他では、四街道が前期選抜（2.18倍）・後期選抜（1.46倍）ともに安定した人気を保っている。40名の定員増となった印旛明誠は、その分志願者数も増加させ、昨年度並みの倍率を確保した。

［5学区－銚子・香取・旭他］

低調な入試が続く学区である。今年度は前期選抜1.29倍（昨年度1.34倍）と下降し、後期選抜では学区全体で定員割れの0.97倍となった。トップ校の佐原の理数科は昨年度を上回ったが、普通科は前期選抜1.61倍、後期選抜1.17倍に留まる。比較的厳しい入試となったのは、佐原白楊で、前期2.08倍、後期1.45倍であった。また伝統校の匝瑳高校は、今年度も志願者数が伸びず、普通科は前期・後期選抜ともに昨年度並みで、理数科は前期・後期共に1.00倍に満たず、二次募集を実施した。さらに、市立銚子も大幅に志願者を減らし、後期選抜でも定員を満たせず、二次募集を実施した。

［6学区－山武・東金他］

東金・山武地域では、全体として比較的緩やかな状況の中、トップ校の成東の普通科は安定した志願者数を確保し、今年度はやや倍率を上げ前期選抜2.01倍を記録した。理数科は志願者を大幅に増やし、前期選抜2.00倍（昨年度1.19倍）まで達した。学区2番手の東金の普通科は、前期・後期選抜ともにほぼ昨年度並みで安定した入試となった。その他、大網の普通科及び九十九里は、ともに志願者数を減らし、特に九十九里は募集人員52名の大幅な二次募集を実施した。

［7学区－茂原・いすみ他］

7学区トップの長生普通科に緩やかであるが下降傾向が見られ、今年度も前期選抜1.88倍、後期選抜1.43倍と昨年度に引き続き志願倍率は下降した。理数科も志願者数は伸びず、前期選抜1.19倍、後期選抜1.25倍であった。中堅校の茂原も過去3年間志願者数は減る傾向で、今年度の後期選抜では全入という結果となった。この学区は、前期選抜1.14倍、後期選抜0.87倍が示すとおり、昨年度に引き続き非常に緩やかな入試状況が続いている。

［8学区－鴨川・館山他］

トップ校の安房は、志願者数を前年より約30名減らし、前期選抜1.77倍まで下降、後期選抜でも1.10倍と倍率を下げた。逆に長狭高校は志願者数を増やし、昨年度を上回る志願状況（前期1.88倍、後期1.30倍）となった。館山総合の各学科は、依然緩やかな入試が続いており、今年度も大幅な二次募集を実施した。

［9学区－木更津・君津・市原他］

昨年度志願者数を大幅に減らした木更津の普通科は、若干回復し、前期選抜2.21倍、後期選抜1.74倍となった。理数科においては、前期選抜定員40名に対し、志願者数38名で定員を満たさなかったが、合格者31名と、いわゆる足きりを実施、低調な入試状況が続いている。昨年度やや持ち直した君津高校は、今年度は志願者数を減らし、前期1.89倍、後期1.25倍に留まった。その他では、袖ヶ浦の普通科は依然人気が高く、厳しい入試が続いている。市原地区では、京葉はほぼ昨年度なみ、市原緑・市原八幡の前期選抜も2.00

倍前後の比較的高い倍率を記録した。

入試制度の方向性

今年度（29年度）はどのような展開があったのかをお知らせしたい。結論を言えば、いよいよ「入試の一本化」が実現されそうである。千葉県教育委員会は、今年度、「千葉県公立高等学校入学者選抜方法等改善協議会（いわゆる入試改善協）」を、第1回平成29年7月10日、第2回10月20日、第3回11月20日の計3回開催した。第1回において、平成29年3月に実施された「千葉県公立高等学校入学者選抜の受検意向調査結果」が報告され、その分析を行う専門部会を立ち上げることが決定した。第2回においては、専門部会による「調査結果の報告（論点整理）」がなされ、第3回の入試改善協において「試案」を出すことが決定された。そして、第3回において、「県立高等学校入学者選抜の改善」（試案）が報告された。次に示すのはその「試案」である。

県立高等学校入学者選抜の改善（試案）

1. 改善の背景

現行の入学者選抜制度については、これまで7回実施する中で次のような現状と課題が指摘された。

○前期選抜では、定員設定が全体の約6割となっていることから受検生の4割以上が不合格を経験しなければならない。不合格になった受検生のうち、その約6割が、後期選抜で同じ学校・学科を受検している状況である。

○学習の成果に加え、生徒の多様な能力・適性、意欲、努力の成果、活動経験等の優れた面を多元的に評価するものとして実施する前期選抜、生徒の学習の成果を主に評価するものとして実施する後期選抜と、それぞれ異なる趣旨で実施されているが、いずれも学力検査を課していることから、それぞれの選抜の違いがわかりにくくなっている。

○2回の選抜があることにより、受検期間が長期化し、中学校・高等学校ともに授業確保が難しくなっている。

2. 改善の方向性

○これまでの入学者選抜の理念を継承し、学習の成果に加え、中学校での取り組みや活動経験等、生徒の優れた面を多元的に評価できる選抜とする。

○これまでの受検動向を踏まえるとともに、新学習指導要領への対応も含めた、中学校・高等学校における授業時間を確保するために、1回の選抜として入学者選抜の実施時期を見直す。

○インフルエンザ罹患による急な発熱等、やむを得ない理由により本検査を受検できなかった者に対し、受検機会を保障するための追検査を設ける。

○受検校をより慎重に決定することができるよう、志願変更等の期間を設ける。また、受検生の負担を軽減するため、学力検査を2日間で実施する。

3. 実施の時期

入学者選抜制度の変更に伴う、受検生への周知期間及び中学校・高等学校の準備期間を考慮して、平成32年度に実施する平成33年度入学者選抜以降から実施する方向で検討。

試案

◆本検査

実施時期　2月下旬（2日間）

検査内容　第1日　学力検査　3教科

第2日　学力検査　2教科

各学校で定める検査

（面接、作文、適性検査、学校独自問題等のうちからいずれか1つ以上の検査）

入学願書等の提出期間　2日間

志願又は希望変更の受付期間　2日間

選抜方法　学力検査、調査書の内容及び各学校の特色に応じて、生徒の多様な能力・適性・努力の成果等の優れた面を多元的に評価できる選抜とする。

◆追検査

実施時期　合格発表までに実施（1日）

検査内容　本検査に準じる

◆結果発表　3月上旬　本検査と追検査の結果を併せて同一日に発表

上記の試案が「改善方針」として、3月20日教育委員会会議において決定されました。

今後の課題として、

①具体的な選抜方法どうするのか。

②現在の前期選抜における選抜枠（生徒の特性・個性に重点をおいた選抜）を設けるのか。設定するとすれば、その上限はどうなるのか。

③無理のない本検査と追検査の日程。

④本検査と追検査の選抜の公平性は保たれるのか。

などが考えられる。今年度もより一層「入試改善協」等の動きに注視したい。